九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

姉崎正治の日蓮信仰と聖徳太子信仰

古賀，元章
福岡教育大学 ： 名誉教授

https://doi.org/10.15017/2200466

出版情報：Comparatio. 22, pp.12-26, 2018-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

姉崎正治の日蓮信仰と聖徳太子信仰

古賀元章

はじめに

一九〇〇―〇三年、宗教学者の姉崎正治（一八七三―一九四九）は海外へ留学する。憧憬国のドイツに留学した際、彼は同国の排他的な愛国心と工業の発展に伴う人心の腐敗を目撃して、自らの宗教研究の挫折を味わう。そうした折、日本国内で床に臥せていた、大学生のときの同級生で高名な文芸評論家の高山樗牛（一八七一―一九〇二）の真摯な人生観に影響を受けて、日蓮宗の宗祖の日蓮（一二二二―八二）に傾倒する。帰国後の姉崎は、留学中に起こった畏友の死去を強く追慕しながら、日蓮信仰の研究者としての人生を過ごす。姉崎には、本稿で後述するように、日蓮信仰の二面性が認められる。それは、絶対的な信仰と包括的な信仰である。前者は日蓮信仰を基盤としており、後者は日蓮信仰の心の拠り所とする『法華経』の一つの特徴（様々な信念の人々が住む現実社会の菩薩行動）に基づいている。

このような信仰の二面性を抱きながら、姉崎は第一次世界大戦（一九一四―一八）に遭遇する。大戦の末期、道徳の乱れを指摘する彼は、人心を基軸とした人本主義と、社会生活の道徳的原理としての民本主義を唱える。これら二つの主義をバックボーンに、執筆活動や社会活動を通して国内統治と国際協調を主張する。

第一次世界大戦の終戦直後、姉崎は聖徳太子を国内統治と国際協調を見事に推進した民本主義の模範と考えるようになる。以後、姉崎は、太子の事跡（たとえば、遣隋使や留学生の国への派遣、一七条憲法の制定、仏教の一乗思想「衆生が等しく仏になる教え」、人格など）を高く評価する。日蓮信仰の姉崎は、次第に太子信仰も抱くようになる。その背景として、姉崎が日蓮と太子の共通の経典『法華経』を信奉していたからであると考えられる。

本稿では、これらの点に注目して、姉崎の日蓮信仰と聖徳太子信仰のそれぞれの特徴を論述したい。

一　海外留学における日蓮傾倒

一九〇〇―〇三年の海外留学をする前、姉崎正治は先にドイツのライプニッツにいる哲学者の大西祝（はじめ）（一八六八―一九〇〇）に宛てた一八九八年八月二五日付の書簡で、「早くベルリンに行きたき者に候」（注一）と書いている。当時の彼の心境は、「海を航して此国［ドイツ］に来たらんとする時の最大の希望は、此文物に躬（みずか）ら接し其精神に於て得る所あらんと事を期したりき」（注二）ということである。一九〇〇年六月上旬、彼はドイツ北部の港町のキールに到着する。同月二〇日、北京の義和団の乱でドイツ公使が殺害される。ドイツの皇帝ヴィルヘルム二世（Wilhelm II, 1859 - 1941）はこの事件に激怒し、同国の遠征軍がキール軍港から出航する際、軍艦上で黄禍論として知られる演説をする。姉崎はこの演説に強く反発し、

日本国内で闘病中の高山樗牛に送った手紙の中で、「見よ、今のドイツの執権者［ヴィルヘルム二世］が、如何に神エホバを己の占有の如く吹聴し、之に反する異教徒を剪滅すべしとの思想を吹聴しつつあるかを」（注三）と書いている。この手紙は、皇帝がキリスト教の神の代理者として振舞っていることへの憤慨を表している。それは、北京の反乱軍を強力な軍隊で鎮圧しようとする皇帝の高慢な圧政に対する立腹である。日清戦争（一八九四―九五）が終わった後、日本は三国（フランス、ロシア、ドイツ）の勧告によって、下関条約に基づき獲得した遼東半島を清に返還する。この三国干渉の張本人がドイツであると姉崎は判断した。ドイツに赴いた姉崎は、皇帝の黄禍論を改めて実感する。海外留学をする前、姉崎は『宗教学概論』（一九〇〇）の中で、宗教学が三つの要素（人心、それを取り巻く社会、両者を統括する何か偉大な勢力）によって構成されことを主張した。（注四）ドイツで彼は、前述したように、両者の望ましいあり方を期待していたが、その期待を裏切られてしまうのである。それは、彼の人生の挫折も意味する。

その頃の姉崎に大きな影響を与えたのが、高山樗牛である。樗牛は、在学中に肺炎を患い、熱海で転地療養する。当地で喉の治療をする大学時代の恩師で哲学者の井上哲次郎（一八五六―一九四四）と偶然にも出会い親しくなる。（注五）そうした親密な関係のもと、樗牛は仙台の第二高等学校に在職中、哲次郎と編纂して『新編倫理教科書』（一八九七）を刊行する。哲次郎によれば、編纂の意図は『是を持って余嚢きに勅語衍義を現はして、此需要を充さんとせり』（注六）である。そこには、『教育勅語』（一八九〇）の解説書『勅語衍義』（一八九一）を推進して、国家的立場から臣民の義務の必要性を要請しようとする彼の意図がうかがわれる。一八九七年五月、樗牛は総合雑誌『太陽』を発行する博文館の大橋乙羽（一八六九―一九〇一）の勧めで、第二高等学校を辞職し、同社の編集主幹に迎えられる。同年五月、哲次郎は発起人となって大日本協会の結成に参加する。この協会は日本主義を主張する。その目標は、「すべて宗教殊に仏教と耶蘇教とに反対して国家主義を以って国民の理想とせんとする」ことである。一八九七年、哲次郎を恩師とする樗牛は、この日本主義を宣伝する一連の評論（たとえば、「日蓮上人とは如何なる人ぞ」、「日蓮と基督」、「日蓮上人と日本国」）を『太陽』に次々と発表する。一連の評論の特徴は、国家至上主義者の哲次郎の影響を受けている。

一九〇〇年、樗牛は文部省から美学研究のため海外留学を命じられる。ところが彼は、留学直前に吐血して入院を強いられる。翌年、彼は海外留学を断念し、人生の絶望感を味わう。病状の悪化は彼に、自分自身の内面を見つめさせることとなる。彼はベルリンの姉崎に宛てた書簡（一九〇一年四月（五月？）二四日付）の中で、「僕は嘗て日本主義を唱へて殆ど国家至上の主義を賛したこともある。今に於ても是の見地を打破るべき理由は僕には持ち得ぬ。唯是の如き主義に満足の出来ぬ様になつたのは、僕の精神上の事実である。僕は

道徳、教育、もしくは社会改良に関する今の人の説には殆どすべて満足の出来ぬ様になった」（注七）と述べている。彼は姉崎宛の別の書簡（同年六月六日付）の中で、「ドーモ日本主義時代の思想が僕の本然の皮相なる部分の発表に過ぎなかったことが今から思はれ……精神は餓て居る。是からチト宗教上の書物を読もうかと思て居る」（注八）と知らせる。「今の人の説」は哲次郎の国家至上主義を示唆するので、一連の樗牛の書簡はこれから恩師の考えに依存しないことを表明している。この時期の樗牛は、まだ自分の求める人生の指針を見出していないが、宗教に関心を抱き始める。

一九〇一年九月末、在野の宗教家の田中智学（一八六一―一九三九）の『宗門之維新』（一九〇一）が樗牛に贈呈される。一九〇一年一〇月二五日、樗牛は智学の家を訪問して、この著書が贈呈された礼を述べ、同書に見られる理想の雄大さと情熱的な文章に感動したことを伝える。早速、樗牛は翌月に「田中智学氏の『宗門の維新』」を発表する。日蓮は、日本が釈尊の御領であり（注九）、世界全体が釈尊の御領でもあると主張した（注一〇）。世界全体には日本が含まれる。智学は聖人の主張に立ち返って、釈尊の教えを世界に弘めるべきであることを強調する。樗牛は、この評論の中で智学の日蓮信仰に依拠して、聖人を「正しく世界統一軍の大元帥也」（注一一）と評する。一九〇二年、樗牛は、国家よりも日蓮仏教を最優先にする一連の評論（「日蓮上人とは如何なる人ぞ」、「日蓮と基督」、「日蓮上人と日本国」）を次々と発表する。樗牛は「静思録」（一九〇二年三月）の中で、「外には生活の為に戦ひ、内には病苦の為に悶きつゝある自分は、更に病よりも貪よりも、恐らくは天下の如何なる物よりも強い『己れの心』と云ふ大敵と闘はねばならないのだ」（注一二）と書いている。「外には生活の為に戦」うことは、妻子や老母を養うためであることを指す。「内には病苦」と闘う「己れの心」は、樗牛の「無題録」（一九〇二年一〇月）に記された「一切の学智と道徳を離れ、生まれながらの小児の心」（注一三）に他ならない。純粋無垢な「小児の心」と向き合うことが、俗世の事柄にとらわれないように努める病床の彼の心境である。

姉崎は樗牛に、一九〇二年七月三日付の書簡の中で次のように書き綴っている。

僕は君の言に従て、田中智学師の本化摂折論を読みぬ。其の鋭利なる見解と強き信仰とは、少なからず僕を動かしたり。特に「本化上行と折伏」の一章は、君の日蓮論と相合して、共に僕の心情に深き響きを与えぬ。僕は思ふ、日蓮を知らざりし僕は、或は日蓮を誤解したるにはあらざるか。此の一章が日蓮宗の人に依りて、

又特に其祖宗の精神を復活するの目的にて書かれたる者にして、此著書の「同情的の信、帰依、奉行」の結果たる此文が、其の信の対象たる日蓮と愛情融合する者とすれば、其本源たる日蓮は、或は、僕の頭中に存する者と大に異なるなりきか。（注一四）

姉崎は、「再び樗牛に与ふるの書」の中で、樗牛の推挙によって智学の『本化摂折論』（一九〇二）を読んで感動した箇所を示している。それは、同書第四篇「折伏正意の立教」の第三章「本化上行と折伏」である。そこには、次のように書かれている。

解るのを後にして先づ信ずるといふのは解ッてから後に信ずるといふのよりも、迥かに捷径にして且つ順当なのである、いづれは信解の二つを具足すべきものとすれば、一つでも早く得た方が勝利だ、而うして解して後に信ずるのは歴劫的で、信じて後に解するのは即疾的である、実は信じて後といふまではなく、信ずると俱に解するのだ、信の深いだけ深く解し、その大なるだけ、純なるだけ、大に解し純に解し得らるゝので、だんだんに解するといふよりは、どこまでも信を発し得らるゝかゞ問題だ、信といッても科学上の信などとは別だ、「理断的の信」ではなくて、「同情的の信」である、帰依、服従、尊敬、奉行、それらの意味で言ふ信の事だ、血の通ッた信、正智に裏まれた真情、真情に縫はれた正智、それらを総称して信といふのだ。（注一五）

この「本化上行と折伏」の文章は、何よりも大事なのが日蓮聖人をひたすら信じることだと力説する。信者の「同情的の信」は、日蓮への「帰依、服従、尊敬、奉行」を必要とする。信者は心底から聖人を信仰する。このような信仰心を抱く樗牛の真摯な姿を思い浮かべて、姉崎は信者が全身全霊の愛情を注いで聖人と一心同体となることを学んでいる。

姉崎は、一九〇一年三月に博士論文「現身仏と法身仏」を脱稿し、翌年一月に文学博士を取得する。この博士論文では、仏教徒は死後の仏陀の説法・遺物・遺跡を崇めることが書かれている。（注一六）それが、仏教徒の信仰に対する姉崎の理解であった。日蓮信仰を基盤とした樗牛の助言（『本化摂折論』の味読）は彼に、畏友が日蓮の人格を崇拝する人物であり、その日蓮が「神人合一」（注一七）「神

人融合」（注一八）を取り成してくれることを深く認識させたであろう。その意味で、樗牛の晩年の人生観は海外留学中の姉崎にとって、日蓮傾倒の契機であった。（注一九）

二　日蓮信仰の二面性

晩年の姉崎は、自らの信仰を振り返って次のように述懐している。

宗教という事は、人名々の世界観に基づいた事であるが、そのうちで自分自身の信仰といえば日蓮上人の信仰である。この信仰は、いわば排他的の信仰であって、釈尊の教えに基き、その正統の組織をたてて、それによって自分の信仰を導き、それに外れた宗教はすべて排除するにある。その意味で自分の信仰は日蓮主義であるが、自分自身の傾向としてはその反対の方向の包括的の信仰で、それゆえ自分が関係した実際方面では、常に包括的の方に働いた。例えば卒業したときに出来た宗教家懇談会にしても、丁酉倫理の運動にしても、或は種々の協和運動、又、十二三年後におこった帰一協会の運動にしても、それぞれの包括的方面で諸々の宗教がよく理解し、共同して進む方面にあった。帰一協会の運動の如きも、万法帰一という事を主にして、諸々の宗教が異なった特色をもって、しかも共通の目的に向って進む事を重んじた運動であった。（注二〇）

この述懐で明らかになるのは、姉崎の日蓮信仰の二面性である。それは、日蓮主義に基づく排他的な信仰と、様々な社会活動（宗教家懇談会への参加、丁酉倫理の運動、種々の協和運動、帰一協会の運動）に見られる諸宗教の協調を目指す包括的な信仰である。

海外留学後から第一次世界大戦（一九一四―一八）までと、右述した様々な社会活動を視野に入れて、姉崎の日蓮信仰の二面性を論じたい。

姉崎は海外留学を終えて、一九〇三年六月に帰国する。早速、彼は高山樗牛の遺族を見舞い、龍華寺（静岡県清水市）で眠る畏友の墓に詣でる。清見潟（同県清水区興津にあった景勝地）に滞在中に樗牛の遺稿の整理がきっかけとなって、姉崎は畏友が心酔した日蓮を信仰するようになる。一九〇五年、彼は畏友の影響によって上人の信者であることを「世界の統一（聖祖降誕に於て）で発表する。（注二一）

海外留学後の姉崎の日蓮主義に基づく絶対的な信仰と深く関わっているのが、田中智学と顕本法華宗管長の本多日生（一八六七―一九三一）である。

姉崎は、一九〇三年一二月二四日に智学が主催する高山樗牛一周忌の本化宗学大会に出席し、樗牛に関して講演をする。その内容が「性格の人高山樗牛」（注二二）という題で公表される。彼は、翌年一月三〇、三一日に樗牛の母校の第二高等学校（宮城県仙台区［現在の仙台市］）の樗牛会で講演している。その内容が「信仰の人高山樗牛」（注二三）という題で公表される。同年四月、京都府立医学専門学生が田中智学を師と仰ぐ「日蓮上人研究会」の創立の際、姉崎は賛成人となる。そして一九〇六年四月二八日、智学が開催した妙

法百号記念大会（神田錦輝館）で、樗牛の日蓮研究について来賓として講演する。智学が一九一〇年から開講する本化夏期講演会（静岡市三保）には、一九一四年まで毎回講師として参加する。（注二四）

後述するように、一九〇九年一月に日生は日蓮の人格と主義を研究する天晴会を創設する。発会式が、神田一ツ橋の学士会館である。智学をはじめ三六名が会員となる。会則の一つは、「本会ノ目的ハ各自修養ノ為メ敬虔ナル態度ヲ以テ日蓮上人ノ人格及主義ヲ鑽仰シ進デ上人敬慕者ノ善友タラント期ス」（注二五）である。姉崎は会の目的に賛同して幹事となり、発足式で「法華経及日蓮上人に対する予の態度」という題で講演する。一九一〇―一五年に天晴会で講演した内容が「日蓮鑽仰天晴会講演集」（全三輯）に収められている。一九一一年一月二二月の天晴会新年会で「威話」を講演し、翌年の例会で「生死」を講演する。

智学は自らが提唱した日蓮主義を『日蓮主義新講座・概論』の中で説明している。そこには、「日蓮聖人の唱導主張された『教義』を・・・・・・汎く信仰も理解も修行も含まれて居て、宗教・宗旨・教法などいふことよりも、今少し広汎な意味に用ひられるのを日蓮主張と申す。・・・・・・純信仰の立場よりも広い意味に、思想的又Aは生活意識の上にまで用ひようとして、之を一般化して日蓮主義と呼倣したのである」（注二六）と書かれている。日生は『日蓮主義』の中で、「日蓮主義の真面目は如何なるものかと云ふに、チョッと言ひ表し悪い事であるが、私共専門の方の研究では之を統一主義と称して居ります、統一と云ふことの前に開顕と云ふことがありますから、開顕統主義とも統一とも云ひ、合せて開顕統一主義とも言ふのである、此四字が先づ日蓮主義を言ひ表すものであると思ふのであります、・・・・・日蓮主義の真面目は開顕統一主義である」と述べている。（注二七）

智学と日生の日蓮主義に共通した特徴の一つは、日蓮信仰を基盤としていることである。晩年の姉崎は、日蓮主義に依拠した排他的な信仰を回想している。彼の日蓮主義は、これまでの論考から判断して、海外留学後に知り合った智学と日生の共通点の影響が認められよう。

晩年の姉崎はまた、包括的な信仰の傾向もあったと回想している。その傾向が様々な社会活動（宗教家懇談会への参加、丁酉倫理の運動、種々の協和運動、帰一協会の運動）に表れていたという。その点を論考する。

一八九三年、クリストファー・コロンブス（Christopher Columbus,1451? - 1506）のアメリカ大陸発見の四〇〇周年を記念して、シカゴでコロンブス記念万国博覧会（The Columbus Exposition）が開催される。この万国博覧会に付設して、当地では世界最初の万国宗教会議（The World's Parliament of Religions）も行われる。このような宗教上の出来事に刺激を受けて、三年後に日本で、キリスト教や仏教や神道などの宗教者が集まり、宗教家懇談会を開いている。『太陽』の宗教欄を担当していた姉崎は無所属の立場で参加して、この懇談会を観察している。そのときの彼は、各宗教・各宗派

が自らの教理の正しさを主張するだけの時代が終わって、諸宗教が協調すべき時代の到来を抱いている。宗教家懇談会が引き金となって、一八九七年に本郷教会の牧師の横井時雄（一八五七―一九二八）の発案で、丁酉倫理会が開かれる。姉崎はこの会合に参加している。彼の証言によれば、人格主義に基づいて、宗派を超えた倫理運動であることと、人格の尊重と宇宙の大道の根本に立った国運の隆盛を目指していることである。（注二八）

海外留学後の姉崎は、一九〇六年に各宗教家の融和による国民指導の教化を図る目的で設立された日本宗教家協和会の発起人となり、三年後に本多日生の創設した天晴会の幹事となる。一九一二年二月、神道、仏教、キリスト教の関係者が、東京の華族会館で三教会同を組織する。この組織の決議は、皇道の扶翼による国民道徳の振興と、政治・宗教・教育の融和による国運の伸張である。（注二九）姉崎は、この組織を取りまとめた内務次官の床次竹二郎（一八六六―一九三五）に感謝を表明する。（注三〇）なぜなら、姉崎は床次と同じ考えであったし、彼の人格に感動したからである。（注三一）同年して、彼らの発言の場となる教育家宗教家懇談会を実現させている。（注三二）同じ六月、帰一協会が結成される。この協会は、前述したように、「万法一帰という事を主として、諸々の宗教が異なった特色をもって、しかも共通の目的に向って進む運動」である。

日蓮信仰前の姉崎は宗教家懇談会や丁酉倫理会に参加して、宗教改革に情熱を燃やして、諸宗教の協調の時代の到来を主張する。彼が信奉する日蓮は、『法華経』を心の拠り所としていた。この経典の特色の一つは、現実の人間活動（菩薩行動）である。（注三三）智学と日生の日蓮主義運動の共通点は、この菩薩行動を人間社会に広く応用することである。姉崎の社会組織（日本宗教家協和会、天晴会、三教会同、教育家宗教家懇談会、帰一協会）への関わりに見られる包括的な信仰は、智学と日生の日蓮主義運動から影響を受けているばかりではなく、日蓮信仰とそれ以前の諸宗教の協調の主張が結びついた社会活動でもあると言える。

第一次世界大戦の末期、来るべき新しい時代に対処するため、姉崎は人本主義を提唱する。『新時代の宗教』（一九一九）所収の「世界の新局面に対する宗教の天職」（同）の中で、彼は「社会的制度も、国家、家族の結合も、人間本然の性から出発して人類の結合に進む人道、即ち人本主義の現はれであると共に、宗教は個人と人道とを一貫する人本主義の理想を表現し、従って、社会、国家、家族は、皆其の根底を人本主義宗教の生命に置き、帰趣を人本主義宗教の理想に求める」（注三四）と書いている。人本主義宗教が、人本主義を推進する宗教の力として説かれている。姉崎は人本主義を人間の生活もに向け、その生活の「根本解決は、人本主義の実行、即ち人間が自らの本性を自覚し、本能の醇化を以て家族と国家と人道とを一貫するにある」（注三五）と力説している。彼は「国家の運命と理想

（愛国者と予言者）」（一九〇四）の中で、「自分の生命の中に国家の生命を有する信仰と勇気とのある人」、「国家を以て自分の生命とする真正の愛国者」、「その国家の運命を指導する予言者、一国の理想を発揮する聖人」（注三六）を持ち出す。上人が姉崎によって、真正の愛国者・指導的な予言者・聖人としての人格者として評価されている。（注三七）海外留学後の彼は自らの宗教思想の要素である人心の模範として日蓮を考えている。そこで、日蓮信仰者の彼の人本主義や人本主義宗教は、上人の人心を土台としているのである。「人本主義の実行」（一九一八）の終わり近くで、「内治外交共に人本主義の理想を以て一貫せよ。是れ新たる世界に処する日本の道である」（注三八）と語っているように、姉崎は、第一次世界大戦後の国民統合と国際協調を主張している。そこには、真正の愛国者として社会と立ち向かう上人を模範として天皇制国家とその現実社会を見据える彼の姿がうかがわれる。

第一次世界大戦終結の直後、姉崎は「人才の発揚と民本主義」（一九一九）の中で、民本主義の必要性も説いている。彼にとって、「民本主義とは、吾吾人間が人間として生活するには、個性の基礎と共に社会結合を要するといふ根本原理であつて、……社会生活から云はゞ、自覚あり、自治自制の力ある個人が自由の発達を遂げ、其で相互扶助の社会結合を遂げる事になる。民本主義は、……社会生活の道徳的原理である」（注三九）である。自らの民本主義と人本主義について、彼は「十九世紀文明の総勘定」（一九一八）の中で、「人性の個性と社会性とを充実するといふ意味で、民本主義の意義を、人間生活の道徳的原理だとすれば、其の究竟は人性本位といふ意味で人本主義といふべきものになる」（注四〇）と解説している。姉崎は、国民統合と国際協調を推進するため、民本主義と人本主義をその推進の用途として持ち出している。

三　聖徳太子への傾倒

第一次世界大戦の直前の一九一三年、姉崎が聖徳太子の仏教思想に強く関心を示す。その関心が『成人』の中に表れている。そこでは、「王法仏法」が述べられる。王法が国家の生命、国家の理想、国体の活現などであると見なされ、仏法が不動の真理であると見なされている。太子が王法仏法の代表的な実践者として紹介される。（注四一）この雑誌の会則の主要な提要は、監獄の教化の拡張と、社会や家庭の悪の除去である。（注四二）この提要に一致するように、彼は太子に言及している。日露戦争（一九〇三―〇四）の後、勝利した日本ではナショナリズムが高まるが、国民は重税に苦しんでいる。（注四三）そうした不安定な日本社会の現状に直面して、姉崎は『成

人』の会則に一致した内容を記述するため、太子を取り上げていると思われる。

一九一三―一五年、日本ハーバード・クラブ（ハーバード大学を卒業した日本人の団体）の推薦によって、姉崎はアメリカのハーバードで講義する。一九一三―一四年の講義と一九一四―一五年の講義では、「日本人の宗教的・道徳的発達」（"Religious and Moral Development of the Japanese"）が開講された。姉崎の一九三〇年の *History of Japanese Religion: With Special Reference to the Social and Moral Life of the Nation*（『日本の宗教史―特に国民の社会的・道徳的生活について―』）の「序文」によれば、同書は「日本人の宗教的・道徳的発達」の原稿に基づいたものである。（注四四）この「目次」は、"Introduction of Buddhism and its Establishment (about 600 - 800)"（「仏教の伝来と確立（六〇〇―八〇〇年頃）」）で、その中の項目の一つは "The Prince-regent Shōtoku, his Ideals and Work"（「聖徳太子、彼の理想と仕事」）である。（注四五）「日本人の宗教的・道徳的発達」のために事前に配布された講義予告にある項目の一つは、"Introduction of Buddhism and its Establishment (550 - 800)"（注四六）（「仏教の伝来と確立（五五〇―八〇〇年）」）である。両方の項目のタイトルは非常に似ている。その酷似と一九三〇年の英書の「序文」から判断して、この英書の項目に書かれた内容の概要が「日本人の宗教的・道徳的発達」にも言及されていたであろう。

そこで、一九三〇年の英書の項目についての太子の記述（注四七）を見てみたい。国家宗教としての仏教の公告と、仏教に基づく壮大な制度の設立が述べられている。その具体的な例が、天王寺、窮民の保護施設、院、貧しい病人を治療する施設である。天王寺の地理的な要所（国内外の一団が大和国へ向かう入り口）の紹介である。摂政としての一〇年間に国内統治の改革と朝鮮との外交に専念した後、中国（隋）との外交関係を日本で最初に築いたことである。六〇四年に制定された一七条憲法が記されている。この憲法の主眼は、人民の守るべき道徳・精神的な調和、臣民や身分の上下関係の道徳的・精神的な調和である。一七条憲法の公布に満足せず、宮中や寺院で仏教経典を講義して、自らの理想を説明する。その講義のテキストが、『法華経』『維摩経』『勝鬘経』である。このように、太子の政治的手腕に触れられている。

一九一三―一五年、姉崎は聖徳太子の為政者としての功績を講義する。その功績の基盤となるのが太子の仏教思想である。日蓮を信仰していた姉崎はこの点に関心を寄せている。その背景には、姉崎が、日蓮と太子の共通の経典『法華経』を信奉していたこと（注四八）が考えられる。

一九一九年、姉崎は「聖徳太子の理想と政策」の中で、太子を政治の土台を人民に置く民本主義者として発表する。（注四九）つまり、太子は人間生活の道徳的原理の実践者の模範と見なされている。この評論では、彼の五つの事跡が述べられている。その事跡は、①四天王寺の経営、②遣隋使并に留学生の派遣、③憲法と一体三宝、④一乗の理想と摂受正法の実行、⑤治国の根本としての聖者の人格、である。（注五〇）

これら五つの事跡を論考してみよう。①ついては、四天王の神力

で国を護るために造営された四王寺に三つの施設（学問・技芸などを修める敬田院、病人のための療病院、医薬を作って分配する施薬院）が存在したことである。②については、仏教や文化の先進国の隋へ遣隋使と留学生を派遣したことである。太子の狙いは、隋から仏法や文化を積極的に取り入れ、日本の国力を高めて隣国と対等に交流することである。そのような対等国交は、仏教の一乗思想と衆生の差異に起因しているという。そうした起因が③に適用されている。憲法は、太子の一七条憲法を指す。一七条憲法では、三宝（仏・法・僧）の崇敬が説かれる。仏陀（仏）は宇宙の一乗法を悟って衆生を教化する。衆生はこの教化を受容して団結する。団結した集まりが僧である。三宝は、密接な関係にあるので、一体三宝と言われる。太子の三宝は、宇宙や人生に横たわる真理を国家の生命に活用させた仏教思想である。太子の根本の理想は、一乗道であり、その実行は摂受正法（一体三宝を推進して、衆生に仏智を体現させ、法を生命とすること）である。そのことが④の内容となる。菩薩の実直な心が、国家の隆盛、人々の幸福を導く。⑤は、太子の人格がこうした理想をもたらしたことを意味する。

一九一九年、姉崎は「聖徳太子の天王寺経営」と「聖徳太子と支那政策」も発表する。これらの評論は、それぞれの表題からわかるように、「聖徳太子の理想と政策」の①と②を踏襲して述べている。翌年、姉崎の『上宮太子聖王』が刊行される。この著書では、第三章は「太子が経営の規模」、第四章は「『東天皇敬で西天皇帝に白す』」、第五章は「憲法と一体三宝の理想」、第六章は「太子の思想信仰」である。第三章は①、第四章は②、第五章は③、第六章は④を受け継いでいる。このような章のタイトルから判断して、同書は「聖徳太子の理想と政策」の内容を繰り広げている。姉崎は『人生の三方面』（一九二四）の中で、一時代に大きな影響を及ぼした模範として太子の信仰を紹介する。その信仰の特徴は、三宝の敬慕、隋との対等外交を支える菩薩行である。（注五一）その特徴は②と③を反映したものである。

四　聖徳太子信仰の深まり

一九三〇年代になると、不穏な状況が次々と起こる。代表的な出来事をあげると、満州事変（一九三一）、満州国の建国宣言（一九三二）、血盟団事件と五・一五事件（同）、国際連盟の脱退（一九三三）、ワシントン条約の廃棄（一九三四）、二・二六事件（一九三六）である。

このように軍部が台頭する中、仏教が姉崎の心の拠り所となる。一九三五年一月、彼は宮中御講書始めの儀で、聖徳太子の一七条憲法、昭和天皇（一九〇一―八九）に立憲君主としての立場を進講する。（注五二）その進講から浮かび上がるのは、天皇制国家のもとで日本と国民が統合する必要性を説く彼の姿である。彼の脳裏にあったのは、天皇制国家のもと、国内統治の確立とその代表者としての聖徳太子だと言えよう。

国家改造を目指して陸軍青年将校が起こした二・二六事件を契機に、姉崎は国家の望ましいあり方を考える。それが、彼の「戒厳令下に一七条憲法を読む」（一九三六）に示される。この憲法の精神は、「人生の大義、国家の正道、国法の常則」と位置づけられ、一八

六八年の五箇条御誓文の言葉（「万機公論」、「天地の公道」、「皇基を振起」など）、翌年の大日本帝国憲法発布の告文の「統治ノ洪範」、翌々年の教育勅語の言葉（「祖宗の遺烈」、「協力輔翼」、「和衷協同」）、同憲法の上諭の言葉（「万世一系の帝位」、臣民の「懿徳良能」など）に通じるものである。（注五三）

第二次世界大戦（一九三九―四五）の最中、姉崎は『聖徳太子の理想と政治』（一九四一）を執筆する。「目次」は、太子の政治の事跡に触れる。「序説」に続いて、第二章「四天王寺の経営規模」、第三章「遣隋使並に留学生の派遣」、第四章「憲法と三宝帰依」、第五章「一乗の理想と摂受正法の実行」である。一九四一年の著書の第二章、第三章、第四章、第五章はそれぞれ、一九二〇年の『上宮太子聖徳王』の第三章「太子が経営の規模」、第四章『東天皇敬で西天皇帝に白す』、第五章「憲法と一体三宝の理想」、第六章「太子の思想信仰」に記された内容を単に踏襲しているだけではない。一九四一年の著書は「維摩居士（古代インドの商人で、釈迦の弟子）の人格は、時代の差別を超越し、形相位置の別に拘泥せずして、直に其の大覚を一切世事に活用して居る。・・・・・太子の人格は此の如き理想を当時の日本に活現せられたのであった」（注五四）で結んでいる。そこには、仏教に立脚して、戦時中の日本に勇気を奮って真摯に立ち向かおうとする姉崎の心境がうかがわれる。そうした心境が、彼の「戦列断想　以和為貴」（『朝日新聞』一九四四年四月一六日）の中で、「「太子の」御遺訓が、今も昔と同じく、人心を動かし、又未来に対する指導を与へる大切な精神の力だと信じる」（注五五）と表現されている。彼は、太子の一七条憲法の御遺訓が、日本のとるべき道の指針になると公言している。

姉崎の聖徳太子への心酔は、執筆活動ばかりではなく社会活動にも見られる。姉崎の『聖徳太子の大士理想』（一九四四）に書かれた報告（注五六）を参照して、一九三五年と一九四四年の彼の主たる社会活動を列挙してみたい。一九三五年二月四日、法隆寺で佐伯定胤（じょういん）貫首（一八六―一九五二）と会い、聖徳太子の御筆の写しを携え、聖霊殿御影の前で『法華経』「寿量品」を読誦する。二月二二日、ラジオで太子について語る。三月二日、旧聖徳太子奉讃会総裁であった故久邇宮殿下（一八七三―一九二九）の別邸に近著の『上宮太子聖徳王文妙』（一九三五）を献じる。一九四四年二月二五―二六日、大阪帝国大学で太子について講義する。六月三日（愛知県豊川市の妙厳寺）、同月一二日（名古屋逓信会館）、七月四日（岐阜県大垣市）、同月七日（岐阜県多治見市虎渓山町）、同月九日（同県高山市）、翌日（岐阜市）、仏教の教識者を対象として太子について講話する。

一九三五年と一九四四年の彼の主たる社会活活動を概観すると、一九三〇代以降の姉崎は、次第に聖徳太子への信仰に傾いている。姉崎の社会活動は、彼の執筆活動と共に、太子の仏教思想への共鳴に基づいているのである。

第二次世界大戦の終戦を迎えた一九四五年八月一五日、姉崎は昭和天皇の玉音をラジオで聴いて、「血涙の思して拝聴す、事ここに至りては何をかいはん、只従来の路を棄て、現実の下に新建設に精進

せんのみ」（注五七）という感想を吐露する。この感想は、第一次世界大戦後と同じように、彼が新しい日本の再建を確立するための決意の表れ受け止めることができよう。彼は晩年まで、国際協調と国内統治を放棄していないのである。

おわりに

一九四七年、姉崎は「我国の天職」の中で、東洋文化と西洋文化の違いを指摘する。前者の基本は、主観によって自分の心と天地が一体になることであり、後者の基本は、外に向かって発動し、外物と相対して天地を自分に利用することである。前者が「静観内省」「一如一体観」「内潜一如観」と書かれていて、後者が「実験観察」「両分観二元観」と書かれている。彼は、第二次世界大戦後の日本が東洋文化の根幹に西洋文化の花を咲かせ実を結ぶべきであると述べる。その点で、日蓮は、東洋に見られる内潜反省（如是観、一念三千、本仏の釈尊との一体、『法華経』の聖者たちとの連なり、宇宙の生命との一体）と、西洋に見られる外発活動（当時の教権執着への奮闘、迫害の挑発、危難の克服）を統合した模範として取り上げられる。（注五八）

同年、姉崎の『維摩経体験者聖徳太子』が刊行される。同書では、太子が人格と信念が申し分のない維摩居士の体験者として紹介される。（注五九）維摩居士は、釈迦の教えを理解する在野の弟子だと言われている。姉崎は、日本では太子が維摩居士の体験者と見なしている。太子のような体験者がこれからの日本で出現する期待を込めて締めくくる。

第二次世界大戦が終戦を迎えたとき、姉崎は国内統治と国際協調の必要性を考えていた。彼の考えを支えたのが、苦難や迫害に負けない強靭な意志を発揮した日蓮への信仰と、二つの目標（国内統治と国際協調）を積極的に推進した聖徳太子への信仰である。その背景には、姉崎が日蓮と太子の共通の経典『法華経』を信奉していたからであると判断できよう。日蓮も太子も、菩薩の浄土となる仏国を実現しようと努めた。姉崎は、人心の望ましいあり方の模範を日蓮の言動に注目し、上人が希求する国家の望ましいあり方の模範を太子の事跡に着目したのである。

注

一　石関敬三・紅野敏郎編『大西祝・幾子書簡集』教文館、一九九三年、三〇三頁。

二　同右、三〇一頁。

三　姉崎正治「樗牛に答ふるの書」（一九〇一―〇二年）（姉崎正治『文は人なり』「樗牛嘲風往復集」博文館、一九二二年［初出一九七四年］、三九六頁）。姉崎嘲風は姉崎正浩のペンネームである。

四　姉崎正治『宗教学概論』東京専門学校出版部、一九〇〇年、一頁。

五　秋山正香『高山樗牛―その生涯と思想』積文館、一九五七年、五九―六〇頁。

六　井上哲次郎「新編倫理教科書序」（井上哲次郎・高山林次郎『新

編倫理教科書』巻一、金港堂、一八九七年、二―三頁）。高山林次郎は高山樗牛の本名である。

七　姉崎前掲「樗牛嘲風往復集」三六三頁。

八　同右、三七五―七六頁。

九　「法門可被申様之事」では、「今の王の権法相似の法を尊んで天子本命の道場たる正法の御寺の御帰依うすくして、権法邪法の寺の国々に多くいできたれるは、愚者の眼には仏法繁盛とみへて、仏天智者の御眼には古き正法の寺々やうやくうせ候へば、一には不幸なるべし、賢なる父母の氏寺をすつるゆへ、二には謗法なるべし。若ししからば日本国当世は国一同に不幸謗法の国なるべし。此国は釈迦如来の御所領」と書き綴られている。日蓮「法門可被申様之事」一二六九年（立正大学日蓮教学研究所編纂『昭和定本日蓮聖人遺文』第一巻、総本山身延久遠寺、一九七一年［初出一九五二年］、四四六―四七頁）。

一〇　「一谷入道御書」では、「娑婆世界は五百塵点劫より已来教主釈尊の御所領也」と書き綴られている。日蓮「一谷入道御書」一二七五年（立正大学日蓮教学研究所編纂『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻、総本山身延久遠寺、一九七一年［初出一九五三年］、九九二頁）。

一一　高山前掲「田中智学氏の『宗門の維新』」一九〇一年一一月（姉崎正治・山川智応編『高山樗牛と日蓮上人』博文館、一九一七年［初出一九一三年］、一七頁）。

一二　高山樗牛「静思録」一九〇二年三月（姉崎正治・斉藤信作『樗牛全集』第四巻、博文館、一九〇五年、一〇二九―三〇頁）。

一三　高山樗牛「無題録」一九〇二年一〇月（同右、一〇八三頁）。

一四　姉崎前掲「樗牛嘲風往復集」四八〇頁。

一五　田中智学『本化摂折論』師子王文庫、一九九八年［初出一九〇二年］、一六二頁。

一六　姉崎正治『現身仏と法身仏』有朋館、一九〇四年、一七七頁。

一七　姉崎前掲『宗教学概論』五三頁。

一八　同右、六一頁。

一九　姉崎の日蓮傾倒の詳細については、拙論「姉崎正治の日蓮傾倒―彼の海外留学（一九〇〇―〇三）を手がかりとして―」『言語文化学会論集』四六、二〇一六年を参照。

二〇　姉崎正治著・姉崎正治先生生誕百周年記念会編『新版　わが生涯』姉崎正治先生生誕百周年記念会、一九七四年（姉崎正治・姉崎正治先生生誕百周年記念会編著『新版　わが生涯　姉崎正治先生の業績』大空社、一九九三年、一一〇頁）。

二一　姉崎正治「世界統一の予言（聖祖降誕会に於て）」『大崎学報』二、一九〇五年、五四頁。

二二　姉崎正治「性格の人高山樗牛」（姉崎正治『高山樗牛と日蓮上人』博文館、一九一七年［初出一九一三年］、三八七―四一一頁）を参照。

二三　姉崎正治「信仰の人高山樗牛」（同右、四一三―三六頁）を参。

二四　磯前順一・高橋原・深澤英隆「姉崎正治伝」（磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教―姉崎正治の軌跡―』東京堂出版、二〇〇二年、五三頁）。

二五　浜島典彦「門下統合と日蓮―天晴会と法華会―」（日蓮宗現代

宗教研究会編『日蓮宗の近現代』日蓮宗宗務院、一九九六年、一四五頁)。

二六　田中智学『日蓮主義新講座・概論』(獅子王文庫編『日蓮主義大講座』第一巻、一九三六年、一三頁)。

二七　本多日生『日蓮主義』博文館、一九一六年、四八七—八八頁。

二八　姉崎正治著・姉崎正治先生生誕百周年記念会前掲『新版　わが生涯』六九頁。

二九　櫻井匡『明治宗教史研究』春秋社、一九七一年、四四九頁。

三〇　姉崎正治「宗教家会同の精神並に事業を継承し発展するに就いての私案」『丁酉倫理会倫理講演集』一一五、一九一二年、九一頁。

三一　姉崎正治「三教会同の性質及び事業」『日本及日本人』五七六、一九一二年、一二三頁。

三二　櫻井前掲『明治宗教史研究』四五〇頁。

三三　中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編『岩波仏教辞典　第二版』岩波書店、二〇〇二年、九二一頁。

三四　姉崎正治「世界の新局面に対する宗教の天職」一九一八年(姉崎正治『新時代の宗教』博文社、一九二〇年[初出一九w一八年]、二五一頁。)

三五　姉崎正治「人本主義の実行」一九一八年(姉崎正治『世界文明の新世紀』博文社、一九一九年、一〇六—〇七頁)。

三六　姉崎正治「国家の運命と理想(愛国者と予言者)」『時代思潮』一—三、一九〇四年、三〇頁。

三七　同右、三一頁。

三八　姉崎前掲「人本主義の実行」一四四頁。

三九　姉崎正治「人才の発揚と民本主義」一九一九年(姉崎前掲『世界文明の新世紀』三四四頁)。

四〇　姉崎正治「十九世紀文明の総勘定」一九一八年(姉崎前掲『新時代の宗教』六三頁)。

四一　姉崎正治「王法仏法」『成人』一四九、一九一三年、二〇—二七頁。

四二　同右、七一頁。

四三　井口和起「日露戦争」(井口編『日清・日露戦争』吉川弘文館、一九九四年、八三—八四頁)。

四四　Masaharu Anesaki, *History of Japanese Religion: With Special Reference to the Social and Moral Life of the Nation*, 1963. Charles E. Tuttle Company: Tokyo, 1966, p. v.

四五　Anesaki, *History of Japanese Religion*, p. iv.

四六　磯崎・高橋・深澤前掲「姉崎正治伝」六七頁。

四七　Anesaki, *History of Japanese Religion*, pp. 56-65.

四八　たとえば、明治天皇(一八五二—一九一二)の崩御のとき、姉崎は大葬に参加した後、田中智学が主催する奉弔大法会に合流して法華経を読経している。磯前・高橋・深澤前掲「姉崎正治伝」六四—六五頁。

四九　姉崎正治「聖徳太子の理想と政策」『宗教研究』三—一〇、一九一九年、二七頁。

五〇　同右、一―三九頁。
五一　姉崎正治『人生の三方面』日本青年館、一九二四年、六四―六七頁。
五二　磯前・高橋・深澤前掲「姉崎正治伝」一〇二頁。
五三　姉崎正治「戒厳令下に十七条憲法を読む」『丁酉倫理会倫理講演集』四〇三、一九三六年、二、二二頁。
五四　姉崎正治『聖徳太子の理想と政治』宗教維新社、一九四一年、三七頁。
五五　姉崎正治「戦列断想　以和為貴」『朝日新聞』二〇〇八六一、一九四五年四月一六日、一〇頁。
五六　姉崎正治『聖徳太子の大士理想』平楽寺書店、一九四七年［初出一九四四年］、四五八―六〇、四六六―六八頁。
五七　姉崎正治「崩雲行」『信人』一五―六、一九四六年、一四頁。
五八　姉崎正治「我国の天職」『法華』三四―一、一九四七年、三―六頁。
五九　姉崎正治『維摩経体験者聖徳太子』平楽寺書店、一九四七年、一〇七頁。